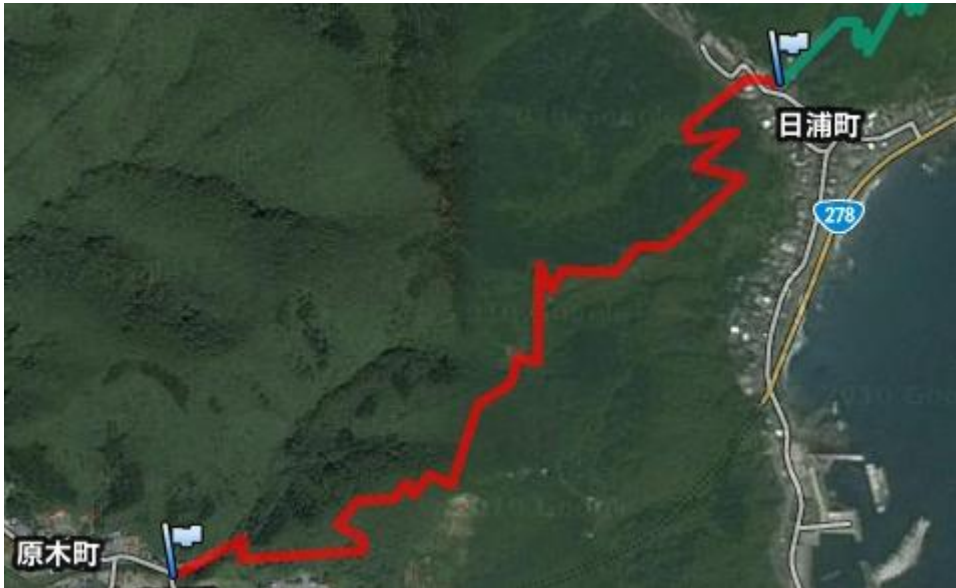


日浦山道 (ひうらさんどう)

2011.12 現在

函館市浜町～函館市新二見町



函館市原木町から日浦町に至る山越えの道が日浦山道である。

寛政9年(1797)にこの山道を歩いた、松前藩高橋壮四郎の『蝦夷巡覧筆記』には「ハラキ。(函館市原木町)

當所ヨリ砂濱道五十間斗リ行キ急ナル小坂上ガル至テ難所坂上ルコトー丁余夫ヨリ山キシツタエニ丁余行キ小坂百間程下リ濱江出小流アリ濱道百間程行キ夫ヨリヒウラ。(函館市日浦町)」と書いている。

登りの109m余は難所だった事が伺える。

又寛政11年(1799)にこの山道を歩いた、徳川幕府の奥詰医師、渋江長伯は『東遊奇勝』に

「ハマキ村(原木町)砂浜にてハマキ川(原木川)を涉り、小沢を伝て山に上がる。路儉にして山も



又高し、僕従牛の喘^{あゑ}する如し、漸山に上り、土人茶を煎して待つ、其味蔗汁よりも過く、水の佳なるには非ず、渴の甚しきなり、山を下り秋羅村(日浦町)に出、・・・後略」と書いている。

こちらの文書でも厳しかった登りが書かれている。

その後は弘化2年(1845)に蝦夷に渡った探検家松浦武四郎の『蝦夷日誌巻之五』(初航蝦夷

日誌)には、

「日浦村 前略・・村内小流有、小商人壺軒。漁者にて漁事の間には皆山稼のみなり。

原木峠 (日浦村の) 小流を越えて、浜路を少し行砂浜也。越えて九折を上り、此間甚さかしくして難所なり。峠是よりまた木立原をしばしば下りて、
峠下 此峠の上、尻岸内、原木の村境なり。下りて浜道しばし行。此下、鮒(ニシン)のよく群来る処也と聞り、此境尾札部より九里廿七丁二十八間あるよし。
原木村 人家六、七軒。むかしは纒(わすか)二軒と聞り。小流有也。昆布小屋あり。此辺の昆布は巾広く尺流し。花折にするなるべし。」

と書かれているが、ここでも原木峠は難所と書かれている。

この厳しい山道を避ける新しい道作られる事になった。恵山方面から函館までは船による輸送手段が主であり、地元民の熱意があまり無く開発が遅れた。

原木から日浦の間の海岸道路は海岸線にトンネルを作って道を開通させた。完成したのは昭和3年8月であった。

函館・樞法華間準地方費道の開削が戸井村字原木(現函館市原木町)の海岸に「七か所の隧道」をくり抜き、尻岸内村字日浦(現函館市日浦町)まで辿り着いた。

完成式典には北海道庁や渡島支庁からも来賓が来るなど式典は盛況であった。

当時の函館毎日新聞のコラムには

「前略・・・原木を過ぎると愈々新道で、海岸に沿って石垣を積み風浪に崩るるを防ぎ、完全な道路となっているが、大島土木部長にして「管内随一の難工事」と言わしめただけに、見るも恐ろしい岩山をくりぬいた隧道が五ヶ所(トンネルは原木1号から7号まで7か所)、しかし風光明媚は小耶馬溪を思わせるに足りる。」と書かれている。

その後、昭和48年(1973)には、原木～日浦間の日浦トンネルが開通して、海岸線の道は廃道となったが、山道は今でもしっかり道が残っている。

海岸線の道は出来たが、まだ山道を通っていた様である。

恵山町史に海岸道路が完成した後の、昭和7～8年頃に恵山から函館まで歩いた、山田きせさん(明治41年生まれ=1908)が20歳を過ぎた頃に歩いた話しが載っている。

函館の祭りを見に行くのに朝の3時に恵山を発ち、草履を履いて赤ん坊背負って47km余の道程を歩いている。途中の小川でおむつを洗濯したりして、夕方4時頃に着いている。

途中の日浦から原木の間は、新しく出来た海岸線の道では無く、日浦峠を越えている。

こ日浦山道も後年は改良を重ねて来ているのか、文書からは江戸時代の頃の道ほど厳しい道では無くなっていると思われる。今では日浦側は無線中継場やテレビ中継場に行く車道が作られているので、旧道は1部を除いて姿を消してしまった。

日浦山道を歩く

函館市街地から恵山に向けて、国道278号線(通称恵山国道)を東に向かって進むと、原木川が出てくる。ここから右手を見ると海にぽっかり浮かんだ武井の島が見える。(写真①)

〇〇橋を渡って橋傍から左に入り、数10m入ってから右に入る。

家が5～6軒並び狭い道を通る。(写真②)右手はコンクリートに囲まれた小流になる。

10mも行くと沢に橋が掛っている。(写真③)

かなり痛みが激しいので、慎重に渡る必要がある。

頭上には送電線があり、その下を登って行く。

道は右に大きく曲り、さらに高度を上げていく。(写真④)

今度は左に曲がる。

ここからは直線状の平坦な道を進む。(写真⑤)

左に下りの分岐があるがここは真っ直ぐ進む。

やがて右に曲れば沢に沿った狭い道を歩く。旧道の雰囲気は見えないのだが、道が崩壊して狭くなったのだろうか。

道は沢を渡るが水の無い沢なので問題は無い。(写真⑥)

今度は沢の右岸の緩い登りを進む。(写真⑦)

道は大きく左に曲がるが、ここからは何度もジグザグに曲る道になる。(写真⑧)

頭上には送電線があり、その下を何度も通る。(写真⑨)

道に電柱が倒れている。(写真⑩)ここを過ぎれば峠は近い。

送電線と分かれて道は左に行く。

直ぐに左に行く分岐が見えるが、ここは真っ直ぐに行く。

この辺りから道ははっきりしない。(写真⑪)

小さな木の枝が邪魔して歩きにくいだが、あっというまに通過して平坦な場所に出る。

前方には北海道開発局、函館開発建設部の日浦無線中継場の施設とアンテナが見える。(写真⑫)

ここから天望は良く、日浦町の海岸線と松浦武四郎が「重畳たる怪岩つづきの浜を越て“立て”壁立高さ五十丈余の岩面、幅凡四丁とも思ふ、実に屏風のごとき平面なり」と書かれた立岩千畳敷もはるか遠くに見える。(写真⑬)

日浦町側への下り道は幅の広いダートの道を下って行く。(写真⑭)

直ぐにT字路に突き当たるが、ここは左に下る。右に登って行けば、高台にNHKの日浦テレビ中継場の施設がある。

道を下って右にカーブし、さらに左にカーブし、また右に曲がって5~6mも進むと。左側に下る旧道が見える。

この旧道を進もう。古い山道の面影が残る道だが歩く事は困難ではない。(写真⑮)(写真⑯)

道を下って行けば再びダートの車道に出る。

ここから平坦な道を進む。右手下には日浦漁港が見える。

さらに進むと左手に大きな赤松が出てくる。(写真⑰)

ここから道は下りに入る。

道は4回ほど大きくカーブするが、幅の広い車道で歩きやすい下り道だ。

下に着くと川が流れ橋を渡る。

付いたところが日浦町の市街地になる。

道なりに進むと、道は2手に分かれる。

どちらの道を進んでも国道278号線(通称恵山国道)に出る。



武井の島が見える 写真①



家の前を進む 写真②



小橋を渡る 写真③



登り道を行く 写真④



平坦な道を行く 写真⑤



沢を渡る 写真⑥



沢傍の道を行く 写真⑦



この辺りから道がジグザグになる 写真⑧



電柱が倒れている 写真⑨



ここから道ははっきりしなくなる 写真⑩



開発局の施設 写真⑪



日浦から東の海岸が見える 写真⑫



峠からの下り道 写真



旧道の入り口 写真⑭



旧道 写真⑮



大きな赤松がある 写真⑯

日浦山道

